URL:https://nsphyogo.com/　E-mail:nsphyogo@portnet.ne.jp

週刊　新社会　号外　（1988年1月18日第三種郵便物認可）

No.648（改題608号）
2024年
7月24日（水）

新社会兵庫

週刊 新社会
発行所：新社会党
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町2-10 三辰工業ビル3F
TEL. 03(6380)9960　FAX. 03(6380)9963

新社会党兵庫県本部　神戸市中央区中山手通5丁目2-3 ☎078(361)3613 FAX078(361)3614 毎月第2、第4水曜日発行　購読料月400円(1部200円)郵便振替:01120-7-16805

250人が「人間の鎖」で訴え

「七夕行動」

王子プールをなくすな

神戸市の王子公園再整備計画の一環として、公園内の王子プールが今夏の営業を最後に秋には解体が予定されていることに抗し、「王子プールをなくさないで！」と署名活動にとりくんでいる「王子公園・市民ミーティング」実行委員会は、このアピールをさらに広げようと7月7日、「七夕行動」と名付けた王子プール周辺でのヒューマンチェーン（人間の鎖）に取り組んだ（写真上）。

東京からロッシェル・カップさんも激励にかけつけた＝7月7日

炎天下の午前11時から始まったヒューマンチェーンの行動には約250人の市民が参加。王子プールと王子動物園のそれぞれの入口を中心にして人が配置され、約30分間にわたって続けられた。「なくさないで！王子プール」と大書された横断幕も掲示して、スカーフを介しながら手をつなぎ、「王子プールを残せ！」のコールをあげた。

夏休み前の日曜日とあって家族連れや子どものプール利用者、動物園来園者も多く、ヒューマンチェーンの行動の前を通る時には、「がんばってください」と声をかけたり、「プールはなくさないでほしいですね」と話していく姿も多く見られた。

この日の行動には、東京・神宮外苑の再開発に反対する運動のリーダー、ロッシェル・カップさんもわざわざ東京から駆けつけて合流。「一緒にがんばろう」と、ヒューマンチェーンの行動者の激励に回った。

また、「王子公園・市民ミーティング」実行委員会がテーマソングのように歌っている「王子公園こわさんといて」の作者のシンガーソングライター、矢谷トモヨシさんもギターを手に自分の歌で行動を応援した。

なお、同実行委員会は、7月は毎土、日、祝日の12時から13時の間は王子プール入口とJR六甲道駅の北側で、15時から16時30分の間はプール入口だけで、「王子プールなくさないで！」の署名集めの行動を行っており、少しの時間でも行動に参加を、と呼びかけている。

「ボクたちもがんばったよ」＝7月7日、神戸市灘区

改めて職場・地域から連帯強化を

ひょうごユニオンが定期総会

ひょうごユニオン（岡崎進委員長）は6月29日、神戸市内で第27回定期総会を開いた。県内の7つの地域ユニオンから約50人が参加し、ユニオンの組織強化と労働運動の再生をめざす今後1年間の活動方針を確認した。

総会の冒頭のあいさつで、岡崎委員長は連合の運動のあり方を批判した後、「改めて労働者の連帯とたたかいの原点に立ち返り、アメリカの自動車産業の賃上げストなどに学び、職場・地域から運動を強めよう」と訴えた。

その後、細川雅弘事務局長らが5つの議案を提案。活動方針案では、「最賃全国一律1500円以上、8時間働けば暮らせる社会を」など6つのスローガンのもと、「集団的労使関係づくり、産別組織づくりを目的意識的に取り組む」ことが強調された。

討論では、「5件の労働相談から組合員の組織化につながる交渉に取り組んでいる」と労働相談・交渉スタッフの拡大が課題だとしたユニオンあしやの発言をはじめ、すべての地域ユニオンからそれぞれのたたかいや取り組みが報告された。

総会議事後の記念講演では元神戸新聞論説委員の中部剛さんが「働く者をめぐる情況とユニオンへの期待」と題して講演。フリーランスの働き方と法整備の現状に触れ、「ウーバーイーツ配達員が労組法上の労働者かどうか中労委で審議中」と紹介し、労働者の保護が大きな転換期を迎えるなかで、「ユニオンには組織維持の困難さはあるが、組織の柔軟さを生かした弱者の支援が求められる」と締めくくった。

（菊地）

記念講演を含めてユニオン運動の原点を再確認したひょうごユニオンの第27回定期総会＝6月29日、神戸市・中央区文化センター

ひょうご描き歩き（152）

播州清水寺

（加東市平木）

中国道・ひょうご東条ICから約15分、標高552mの御嶽山山頂に西国三十三所第二十五番札所の播州清水寺がある。京都の清水寺と区別するため播州を冠して呼ぶのが通常。寺伝では1800年前（古墳時代）、天竺の僧・法道が創建したとされるが、兵庫県南部には法道仙人を開基とする寺院が多くあり、そもそも法道仙人とは天竺から紫の雲に乗って日本へ渡来したとされる伝説上の人物であるので、この寺の開基は不明。

スケッチの仁王門が駐車場のすぐそばにあり、そこから境内に入り石垣の道を通り平坦な道を歩いていくと薬師堂、大講堂があり、その右側の石段を上がっていくと途中に地蔵堂、鐘楼、上りきると正面に本尊を祀る根本中堂がある。その裏手にはその水面に顔を映すと寿命が3年延びると伝えられる「おかげの井戸」もある。本尊は十一面観世音菩薩で、両脇仏の毘沙門天立像、吉祥天立像と共に30年に一度開帳される秘仏となっている。

1913年（大正2年）の山火事で寺は全焼し、現存の諸堂はすべてそれ以後に再建されたものである。

山頂への道には約600本の桜が植えられており、桜の名所となっている。ご詠歌は〈あはれみや　普（あまね）き門（かど）の品々に　なにをかなみのここに清水〉

（嶋谷）

水脈

こんな時代錯誤が通用するのか。自民党元衆議院議員の笹川堯氏が党群馬県連大会で行ったあいさつだ▼「お金を出したら入口が増えると思ったら大間違い。やっぱり男がしっかりしないといけない。あなたの子どもならぜひ産みたい。そういう気持ちになるような旦那が増えなきゃだめだ」「みんな胸に手を当てて反省してください、子どもの少ない人は」▼こうも言う。「もちろん人間のことですから、子どもができない人もいる。しかし、その人はその人として働いて、世の中のために尽くしているからそれはそれでいい」「男がしっかりすれば、必ず女性は子どもをこしらえてくれる。頼まなくても、わが愛する主人のために子どもを産もうとなる。お金の問題ではない」会場には非難の声ではなく、笑い声が響いていた▼うんざりする。男らしさとか男の甲斐性とか、性的少数者への「生産性が無い」発言だとかを、どこかで黙って許容してきた社会がある。女は子を産み、社会のために育てる役割において評価される時代の再来を、憲法改悪とセットのように企図する勢力もある▼人間を消耗品扱いし、対象を絞り込む「手当」で黙らせる。少子化の背景にある分断社会を何としても変えたいものだ。

能登半島地震被災地救援

ボランティアに参加して

被災から半年。復興の遅れを実感

「令和6年能登半島地震」連合被災地救援ボランティア（第12クール）に参加しました。ボランティア活動は6月10日～14日の5日間。総勢57人が全国から集まっていました。派遣先は珠洲市と輪島市で私たちJP労組からの参加者は輪島市で活動しました。

活動内容は、輪島市社会福祉協議会に代わって住民の状況・ボランティアニーズ把握の「ききとり訪問」を行うのがメインです。

毎朝7時に宿（七尾市・和倉温泉）をバスで出発し、1時間半かけて輪島市入り。2人1組4人でレンタカーに乗り、渡された地図を片手に、軒並み訪問のローラー作戦です。全壊・半壊の家も多く、地域によってはほとんど避難所や仮設住宅に移っていると思われるエリアもありました。

困りごとはないですか?と尋ねると、「ありすぎて何を頼んでよいか」と言う方もたくさんいました。公費解体の申請は通っていても、いつになるかは全く見通せないそうで、「今年中には無理では」と口々におっしゃっていました。

輪島市は朝市のエリアがニュースではよく取り上げられますが、それ以外の場所の被害も大きく、黒い瓦屋根にブルーシートがかかった家がほとんどです。「震災2週間後に来たのか?」と思うぐらい復興は進んでいません。倒壊した家が歩道に崩れていたり、車の行き交う道路に家屋が崩れたままの場所もありました。道路の状態も悪く、幹線道路ですらバスに乗っていたら車酔いをしそうになるほど揺れます。

住民の方から要望を聞きながら、私たちでできることは社協に連絡を入れ、作業を行いました。濡れてしまった畳を2階から運び出したり、家具や電化製品の運び出しをしたり、倒壊した建物に保管してあった貴重な輪島塗（大きな絵画のような作品）十数点もガレキを撤去し運び出したりしました。

被災された方々の声を直接聞くという貴重な体験をさせてもらいました。

参加者みんなで寄せ書きし、私は「一日でも早く健康で文化的な生活がとり戻せますように!」と書きました。

阪神・淡路大震災と比較してこの復興スピードの違いは何なのかと考えさせられました。国や県を挙げた力強い支援が必要です。

（明石・日置孝）

輪島市の朝市エリアは震災直後とほとんど変わらない風景が残ったまま＝輪島市

斎藤知事は責任を取って辞職を

新社会党兵庫県本部が声明発表

斎藤元彦兵庫県知事のパワハラ疑惑などを県幹部が内部告発した問題は、告発の当事者が予定していた百条委員会への出席を前に自死するという異常な事態に至るなかで、新社会党兵庫県本部と同近畿ブロック協議会は7月16日、斎藤知事の辞職を求める声明を発表した。以下はその声明。

兵庫県庁と道を挟んで向かい側にある新社会党県本部事務所の窓に横断幕＝7月16日

今年3月中旬、当時の西播磨県民局長が、斎藤元彦知事や県幹部らのパワハラや違法行為など7項目にわたって内部告発した問題は、その疑惑の調査のために県議会によって設置された百条委員会で証人として出席する予定だった当の元西播磨県民局長が7月7日、委員会を前に自死するというきわめて遺憾で悲しむべき事態となりました。

元県民局長の告発文書は、斎藤知事が、職権で自らの選挙運動への幹部職員の違法な動員、特定企業や業界との癒着、異常な金品の請求、度を越した職員への叱責・恫喝・罵声などを行ったことを指摘したもので、事実であれば知事としての資質が当然厳しく問われるような内容でした。

この内部告発文書をめぐるこの間の一連の経過を振り返れば、今日の異常な事態に立ち至った責任は、斎藤知事自身の責任に帰するところ大と言わねばなりません。

斎藤知事は、内部告発文書が明らかになるや、客観性を担保できない県内部の調査だけをもとに、記者会見では「うそ八百を並べ立て…」などと断じて文書の内容を否定し、県人事課は元県民局長を解任、3月末での退職も認めないという一方的な処分を下しました。

4月になり、元県民局長が文書内容の一部を県の公益通報制度にもとづいて公益通報しましたが、公益通報をしたことを理由とする公益通報者の解雇の無効や不利益な取り扱いの禁止を定めた公益通報保護法に反するようなかたちで、県は5月7日、元県民局長が停職3か月の懲戒処分を行いました。

この間、県議会での質疑で告発内容の一部が真実であることが明らかになっていたにもかかわらず、また、斎藤知事自身が再調査のための第三者機関の設置を表明しながらもその調査を待つこともなく、「調査の前に処分ありき」の処分断行でした。

これだけの経緯からも知事の対応には妥当性がなく、きわめて高圧的なものだと言わねばなりません。

この問題をめぐっては、その後、県議会によって疑惑の真偽を調査する百条委員会まで設置されるという事態に進みましたが、元県民局長の死亡という痛恨の事態に至るなかで、7月10日には県の職員労働組合が「もはや県民の信頼回復が望めない状況」だとして斎藤知事に「最大限の責任」を取ることを求める申し入れを行いました。

そして、7月12日には斎藤知事の最側近と言われていた片山副知事が「県政混乱の責任を取って」と辞職届を提出するとともに、同副知事から斎藤知事に対して5度も辞職を進言したが断られたという事実も明らかにされました。

いま、県政は混乱の極みにあり、斎藤知事と職員との間に不信感が広がっているばかりか、県民の間にも斎藤知事の責任を問う声が広がっています。

斎藤知事自身は、これまで十分な謝罪の言葉もなく、任期を全うすると強弁していますが、県政の混乱の収拾のためにも、今日の事態と自らの責任を重く受け止め、即刻、責任を取って辞職することを私たちは強く求めるものです。

2024年7月16日

新社会党兵庫県本部
委員長　粟原富夫
（神戸市会議員）

新社会党近畿ブロック協議会
議長　山下慶喜
（茨木市議会議員）

インフォメーション

■「原爆と人間」写真・絵画展◎8月8日（木）～8月13日（火）11時～19時◎デュオギャラリー（JR神戸駅南・地下街）◎入場無料◎主催＝神戸市原爆被害者の会

■日本軍「慰安婦」メモリアルデーin神戸／映画とトークの集い◎8月4日（日）14時◎神戸市立婦人会館◎映画「大娘（ダーニャン）たちの戦争は終わらない～中国山西省・黄土の村の性暴力」と宮内陽子さんのトーク◎資料代800円（学生・障がい者無料）◎主催＝「慰安婦問題」を考える会・神戸

改憲の動きをウォッチング

■改憲勢力、秋の臨時国会に改憲原案提出めざす　引き続き閉会中審査を要求

総裁任期中の改憲実現が破綻した自民党は、憲法改正実現本部の中に新たな作業チームを設け、条文化に向けた議論を進めている。衆院と参院の憲法審査会で議論の進捗状況が異なり、衆参で意見の違いがあることから、作業チームは、衆参の足並みをそろえ、条文化の作業を加速させることが目的だ。

緊急事態条項をめぐっては、「条文案を早期に作成したい衆院側に対し、参院側は各党との協議を重視する」（東京）。また、大規模災害など緊急事態対応をめぐり、「衆院は議員任期の延長を主張し、参院は憲法が定める『緊急集会』の活用を訴え、党内の見解が分かれている」（時事）という状況。

実現本部の古谷本部長は記者団に「党内の意見を擦り合わせないと、他党との交渉や憲法審の議論に支障が出る」と説明した（東京）。

衆参の意見の違いは大きい。これでは閉会中審査などを他党に求められるものではなかろう。

■「それでも安保法制は違憲だ」法律家は訴える　集団的自衛権の行使容認から10年

安倍内閣が憲法解釈を変更し、集団的自衛権の行使容認を閣議決定してから10年。翌2015年には安全保障関連法（戦争法）が成立した。

第2東京弁護士会の主催で開かれたシンポジウムで元最高裁判事や元内閣法制局長官ら法律のプロは「それでも安保法制は違憲だ」と声を上げた。

東京新聞がシンポジウムの発言を収録している。紙数の関係で全てというわけにはいかないが、いくつか紹介しよう。

・元最高裁判事の浜田邦夫氏は参院中央公聴会で「法案は違憲」と明言。シンポジウムで「立法府である国会で議論するべき問題が、行政府である内閣によってどんどん進められてしまった」と問題点を指摘した。

・元内閣法制局長官の宮崎礼壹氏は9条1項に触れながら、「40年にわたる積み重ねがある解釈をひっくり返すことになる」と強調。

・学習院大大学院の青井美帆教授は「安全保障政策が意識的に憲法問題ではないものとして扱われている」と危機感を表明。「いまの学生が教わるのは政府解釈であり、この世代が社会の中心になろうとしている」と。

岸田政権下でも2022年、安保関連3文書の改定によって敵基地攻撃能力の保有が閣議決定された。この10年、国の行方を左右する問題が閣議決定で決められた。

戦争法が制定された2016年以降、全国22カ所の裁判所で計25の訴訟が提起された。原告数は合計7千人以上。

・「安保法制違憲訴訟の会」の共同代表を務める伊藤真弁護士はシンポジウムで、「本来は政治の力で改廃させるのが筋。だが、裁判所には違憲立法審査権があり、政治が行ったことの違憲性を指摘することができる。司法の役割を果たしてほしいという思いから訴訟を起こした」と説明。だが、各地の裁判所は徹底して憲法判断を回避した。

（中）

ガザに平和を！

神戸で170人が市民集会とデモ行進

市民デモHYOGOが主催

「イスラエルの残虐行為に目をつぶらず、即時停戦を求めて世界の人々と共に声をあげよう！」――と、「ガザに平和を！市民集会in兵庫」が6月30日、170人が参加して神戸市内で開かれた。

市民デモHYOGOが主催したもので、広島市立大学の田浪亜央江准教授の講演が行われた。田浪さんは講演の中で、「パレスチナ問題がたんに2つの武装勢力が土地や宗教をめぐって争っているかのように見なすのはやめよう」と指摘するとともに、「イスラエルという強大な国家が、ある土地の住民に対して、民族を理由に植民地化し、その土地と財産を奪おうとしているもので、根本はその民族がいなくなる状況をつくるという『民族浄化』だ」と強調し、少人数からでも「ジェノサイドをやめろ」の声を上げ続けるよう呼びかけた。

集会では、講演を受けて「命がこれ以上奪われないために、イスラエル政府に直ちに攻撃を止め、戦争を終結させるよう強く要求する」旨の申し入れを行うことが確認されたほか、土曜日に三宮のマルイ前で行っているスタンディング行動への参加が呼びかけられた。

集会後のデモでは、ヘシャブを被ったムスリムの人たちをはじめ120人が参加し、「日本はイスラエルに加担するな！」、「フリー、フリー、ガザ」などとアピールして会場から元町商店街を通る行進を行った。（鍋島）

170人が参加して広島市立大学の田浪亜央江准教授の講演を聴いた＝6月30日、神戸市中央区・婦人会館

集会後は「フリー、フリー、ガザ」などのコールでデモ行進＝6月30日、神戸市中央区

実弾演習や日米合同軍事演習に抗議

7・6あいば野集会に200人

「実弾演習反対！日米合同軍事演習反対！憲法改悪阻止！7・6あいば野集会」が7月6日、滋賀県高島市で開かれ、近畿各地から200人が参加した。主催したのは、平和フォーラム関西ブロックとあいば野に平和を！2024近畿ネットワーク。

あいば野自衛隊演習場では、19回目となる日米合同軍事演習「オリエントシールド24」が7月18日から26日まで強行される。1980年代から強行されてきた日米合同軍事演習では、2015年から6年の間の4回の合同軍事演習で毎回、直前に実弾の「誤爆事件」がひき起こされてきた。

6日の集会では、主催2団体のあいさつに続き、たたかいの報告があった。陸上自衛隊・祝園分屯地のミサイル弾薬庫拡張問題に取り組む「京都・祝園ミサイル問題を考える住民ネットワーク」の松尾憲さんは、「弾薬庫の調査・造成費で今年度104億円の予算が計上されているが、住民や私たちはマスコミ報道で初めて知った。学研都市にある精華町には多くの企業や学研施設などが集積しているが住民には知らされていない。今後大きな住民運動になるようネットワークを広げる」と報告。

京丹後の米軍Xバンドレーダー基地撤去をめざす京丹後市議の永井友昭さんは、「基地建設から10年。重要土地利用規制法で5月15日から特別注視区域に指定され、一定面積以上の土地売買には事前届け出が義務付けられた。また、区域内で機能阻害行為が見つかれば刑事罰が科されることになり不安の声が上がっている」と訴えた。

憲法を生かす阪神連絡会も参加する「9条改憲NO！西宮芦屋市民アクション」など3つの市民団体の呼びかけで西宮で始まった市民の行動「もう黙ってられへん、みんなで行動！」の第3弾が6月29日、阪神西宮駅前で行われ、約60人が参加した。

その後、滋賀県民平和・人権センターと「近畿ネットワーク」から決意表明があった後、参加者は高島市内をデモ行進した。（中村）

近畿各地から200人が参加し京丹後市や京都・精華町祝園の反基地闘争の報告も受けた＝7月6日、滋賀県高島市

もう黙ってられへん、みんなで行動！

市民団体が西宮で第3弾

まず街頭宣伝を行い、その後の集会では市民のほか、県会議員、市会議員、野党の代表などいろいろな立場から、自民党政治への怒りをはじめ、それぞれの熱い思いをアピールした。

「戦前、軍国主義が生活を破壊し多くの若者が亡くなった。二度と戦前に戻さないよう命ある限り頑張りたい」「沖縄で少女が米兵に暴行されたが政府は選挙が終わるまで隠していた。政府は米軍による人権侵害・犯罪にも抗議しない」と男女の中高齢者から怒りの訴え。また、西宮市の財政構造改善計画に対し、「市民サービスを削る一方で大規模開発は進める市のやり方は、社会保障を削って軍事費に回す自民党政治と同じ」と訴えた市民活動家。さらに、兵庫県知事のパワハラ問題をめぐり51年ぶりの「百条委員会」設置にむけて努力した女性からは「ネット中継やホームページを見て拡散して欲しい」との訴えも。

集会後には駅前商店街をパレードした。（奥山）

約60人が参加して街頭宣伝、街頭集会、パレードを行い、自民党政治への怒りなどをアピールした＝6月29日、西宮市

「ピースフェスタ明石」が20回目

8・10～8・18

「ピースフェスタ明石～平和・いのち・子ども～」が8月10日から18日の期間、アスピア明石北館（ウィズあかし）で開催される。同フェスタは2005年に始まり、今年は20回記念。

開催要項は以下の通り。

【ウォールギャラリー展】（入場無料）

■**絵本『はだしのゲン』複製原画展**◎8月10日（土）～18日（日）午前9時～午後9時（13日は休館日、18日は午後5時まで）／8階

【同時展示】『ヒロシマ・ナガサキ原爆写真パネル』（7階）、『サダコと折り鶴ポスター』（8階）

■**今と昔、平和を考えるギャラリー展**◎8月17日（土）午前11時～午後8時、18日（日）午前9時～午後5時（8階・スペース∞など）

【戦争体験の集い】（入場無料）◎8月17日（土）午後1時～午後2時30分／8階・スペース∞

【メイン行事】（有料／前売り・予約券：大人1000円、当日券：大人1200円、※障がい者・学生は半額、高校生以下は無料）

■**神田香織講演会「うったえは、『明るく、楽しくしつっこく』」**他◎8月18日（日）午後1時～午後3時／アスピア明石北館9階・子午線ホール

《連絡先》078・912・2797（明石地労協）、090・6368・5269（狩郷）

地域ユニオン あちこち あれこれ ㊲

介護保険改票反対運動を総括

「史上最悪の介護保険改定に反対する兵庫の会」（以下、「兵庫の会」）は5月28日に解散を決定したが、熟年者ユニオンとしての総括文を「会報7月号」から抜粋して報告する。

運動の結果は、①自己満足的だが、利用者負担の2割化と要介護1、2の介護保険からの切り離しが先送りされた。②さらに、神戸市の保険料値上げが当初の予想よりかなり抑えられた。③しかし、介護職の賃金は春闘相場に比べ少ししか上がらず、また訪問介護では給付が切り下げられた。

神戸市に限れば、パブリックコメントないし口頭陳述への回答は、誠意が感じられないものであった。また、第9期事業計画でも施設の拡充等は一切触れられず、無責任さが露見した。

（1）熟年者ユニオンの昨年の3回にわたる「介護保険制度を考える集い」勉強会は、会員の運動への意志確認であった。

（2）署名総数3755筆は運動の内実を表した。①街頭行動に力を注入し、街頭で市民の理解を深める活動を重ねた。街頭署名行動は33回、延べ参加者293人、街頭での署名数は1588筆（全体の約半数）で、成果を上げることができた（数字は「兵庫の会」全体の集計）。②自らの工夫で100筆以上を集めた人をはじめ、熱意ある人々が全体数を押し上げた。③街頭行動は、阪神間、宝塚、神戸市各区、明石で行われたが、明石以西や内陸部に広げられなかった。熟年者ユニオン及び7団体の組織的限界を感じさせるものとなった。

（3）粟原・香川・赤田の神戸市議3氏、梶川・大島の両宝塚市議、山口芦屋市議には街頭行動および議会での協力を得た。さらに大椿参議院議員は署名簿提出に尽力してくれ、「4・21討論集会」にも参加してくれた。各議員との接点ができたことは今後の運動に向けた成果である。

今後も、厚労省の訪問介護職の給付減額反対、先送りの課題が第10期を待たずに実施される可能性があり、介護保険改悪反対の運動は継続を余儀なくされている。

菅沼祥三（熟年者ユニオン）

おんなの目

ミャンマーから来る学生たち

私の仕事は非常勤の日本語教師だ。日本語学校の学生は、主に日本で働きたいと思ってやってくるアジア各国の若者である。「留学生」と呼ばれているが、日本人が欧米に留学するのとは違い、自国では満足な収入が得られる仕事がないため日本へやって来るのだ。

10年以上前は、中国人留学生が一番多かったそうだ。コロナの前は、ベトナム人が断然トップだった。しかし、ベトナムは国内の経済がかなり発展し、円安も進んだため、コロナが終わって入国してきたのはネパール人とバングラデシュ人。そして今、急増しているのがミャンマー人学生である。

2011年の民政移管、2015年の総選挙でのアウンサンスーチー氏率いるNLD（国民民主連盟）の圧勝を経て、ミャンマーは曲がりなりにも民主国家として歩み始めていた。日本や欧米からの資金も流れ込み、多くの企業が未開拓のアジアの新興国に進出した。

ところが2021年、誰も予想していなかった軍事政権のクーデターである。かつて民衆は軍に屈服したが、今回は違った。10年の民主政治のあいだに自由と豊かさへの希望を味わった市民は、命をかけた闘いに身を投じた。

非武装の抵抗運動は無残に踏みにじられ、若者たちは武器を手に山岳地帯へ向かった。私たちは心配しながら見守るしかなかった。ところが、昨年の秋から武装抵抗勢力がミャンマー軍に勝利し、支配地域を広げているというニュースが入ってきた。国民の支持を得られないミャンマー軍の士気は落ちているという。

焦りのあらわれか、今年2月、軍事政権は18歳以上の男女に対する徴兵制の実施を発表した。今年、留学生として日本に入国するミャンマーの若者が、男女とも激増していることと無関係ではないだろう。ある男子学生は、家族のすすめで来日したが、国で大学を卒業しており、以前に日本への留学を考えたことはなかったと話していた。

今年の5月、軍事政権に抵抗しているNUG（国民統一政府）とKNU（カレン民族同盟）の代表者が来日し、苦しんでいる人々に直接（軍を通さずに）人道的支援を届けるように求めた。少数民族の武装勢力は、ミャンマーが長年抱える問題とされ、それを口実に政府による軍事支配が続いていたという面もある。それが今、民主抵抗勢力と少数民族が協力して軍事政権を倒そうという局面を迎えたのだ。

思わず「がんばれ」と言いたくなるが、武装抵抗を貫徹することは血が流れ続けるということだ。ウクライナのように、パレスチナのように。つらいことだが、闘うしかないという決意は痛いほど感じる。そして、外国へ逃れたミャンマー人の若者には、身の危険のない所でより良い生活をおくり、いずれは祖国の将来を担ってもらいたいと願う。

（H・N）

本棚

『身近な有機フッ素化合物から身を守る本』

植田武智著／食の安全・監視市民委員会／500円（頒価）

PFAS汚染の対策等を解説

「PFAS」汚染に関し、環境省と国土交通省が6月25日、ようやく全国の水道事業者などに対して、これまでの水質検査の結果などを9月末までに報告するよう要請した。

紹介するブックレットは、「PFAS」とは何か、人や環境にどう影響するのかをできるだけわかりやすく「知る」、どうすれば「環境を守る」ことができるか、日常的に「できること」は何か、などを解説している。出版は、2003年に設立、消費者の立場から真実を知り、意見を出し、食の安全を確立させることを中心に活動してきた「食の安全・監視市民委員会」である。

映画「ダーク・ウォーターズ」は、大手化学メーカー・デュポン社の工場廃棄物による土壌汚染から近くの牧場の牛が次々と病死した事件に端を発し、工場労働者や近隣住民に異常な妊娠やがん発症が相次いでいたこと、企業側がそれらを事実として把握しながら有害物質の危険性を40年間も隠蔽し、垂れ流し続けたことが、実際に取り組まれた法廷闘争を舞台に描かれている。その有害物質こそ「PFAS（有機フッ素化合物の総称）」である。映画に登場するデュポン社のフッ素加工フライパンのCMは、日本でも「軽い、焦げ付かない、手入れが簡単」と繰り返し流され、料理番組で登場するフライパンは、ほぼ全てフッ素樹脂加工に置き換わっていった。

映画の舞台となったアメリカは、PFASの危険性を受けとめ、すでに製造・使用禁止となり、人体への影響を無くそうと極めて厳しい水準を飲料水などに課している。それは、ヨーロッパでも同様だという。

日本ではどうか。米軍基地のある沖縄県や東京都多摩地域で地下水や水道水が「有機フッ素化合物PFAS」に汚染されている事実は、少しずつ明らかになってきた。ジェット燃料などを原因とする火災は、水だけでは消火できないため特別な泡消火剤が必要とされ、分解しにくく、火や燃料の表面を覆い酸素を遮断できるため主要成分がPFASの泡消火剤が、訓練による使用や保管中の漏出事故によって周辺土壌を汚染したとみられる。アメリカ国内にある基地の汚染は、すでに浄化済みとされるが、日本における汚染については、立ち入り調査すらできていない。

加えて深刻な課題が明らかになってきた。それは、全国各地の河川や地下水で、PFAS汚染が相次いで計測されていることだ。周辺にPFASを扱う工場や、基地も関連施設も無いのに、である。筆者の住む明石市の水道水も一時、国の基準を超える数値になっていたことが明らかになった。活性炭の増量など水道水の安全は保たれていると市は公表しているが、汚染の原因は不明なままだ。明石の水は昔から美味しく腐りにくい水と言われ、外国船から重宝されてきた歴史がある。皆、安心して水道の水を飲み続けてきたが、身体への残留はどれくらいなのか不安も抱える。

ブックレットは、日本政府が長年、基準値を持っていなかっただけでなく、そもそも水道法で検査を義務付けている「水道水質基準56項目」にはPFASの項目は無かったと指摘している。そして、やみくもに恐れるより、どうすれば、これ以上の汚染を無くせるのか、可能な個々の安全対策は何か、国や自治体の役割は何か等、社会的な行動が必要と提起している。ぜひ一読を。

（岡﨑宏美）

シネマランド

九十歳。何がめでたい

百寿の作家、佐藤愛子のベストセラーエッセイの映画化

食糧事情が豊かになったせいか、医療技術が向上したせいか、90歳や100歳まで生きる人が珍しくなくなってきた。もう「米寿」や「白寿」では間に合わなくなり、「茶寿」（108歳）や「皇寿」（111歳）と呼ばれる寿も出現してきた。「人生50年」と言われていた武士の時代から比べると夢のような世の中に私たちは生きている、と思う。

殊に、日本の平均寿命は世界一と言われている。しかし、長生きが喜べない世相が拡がっている。長生きよりも「ピンピンコロリ」が理想だと多くの人が口にする。

この映画は、昨年100歳を迎えた作家・佐藤愛子のベストセラーエッセイ「九十歳。何がめでたい」の映画化である。佐藤愛子役は、昨年10月に90歳の誕生日を迎えた草笛光子で、まさに等身大の90歳役を演じる。

直木賞や数々の受賞歴に輝き、90歳で断筆宣言をした佐藤愛子は、社会とのつながりを絶たれ、新聞やテレビをぼうっと眺めるだけの日々になってしまった。同じ屋根の下で暮らす娘・響子（真矢ミキ）や孫・桃子（藤間爽子）には愛子の孤独さは理解できない。断筆してのんびりと暮らすはずだったが、却って気分は沈んでいく。

そのころ、大手出版社に勤める中年記者の吉川真也（唐沢寿明）の所属する女性誌『ライフセブン』編集部で愛子の連載エッセイの企画が持ち上がる。若手社員が依頼に行くが、断筆を理由に断られてしまう。諦めようとする編集長に対して、吉川は異を唱え、自ら愛子の家を訪れ、持ち前の昭和気質で一歩も引かない口説きが始まる。しかし、愛子も一歩も引かない。結局、吉川はすごすごと帰らざるを得なかった。

しかし、その吉川の姿にほだされた愛子は、連載タイトル「九十歳。何がめでたい」と題した原稿を吉川に渡すことにしたが、愛子は何を書こうか思案する。そして吉川の助言も取り入れ、日本で人々が思っていても口に出せないような「九十歳のヤケクソ」をエッセイにぶつけることにした。

超長生きをしてこの世の中はどうなったのか？監督の前田哲は語る。

「吉川のように昭和をいつまでも引き摺っている中高年は多いと思いますね。（中略）それに気づかないまま、良いと信じてきた価値観に固執して、捨てられない。老いるとは、捨てることでもある。体力も気力もなくなって、若い頃のように、あれもこれもできなくなる。割り切れるようになれば、しがらみやこだわりから解放されて、どんどん自由になっていく」と。

映画の中の愛子がグチる。「いつの頃からか、町全体から大らかさが消えて、声を出さず、静かであることに、誰もが黙々と従っている不気味さが漂っている。自転車はベルを鳴らさず、忍者のように現れ、子どもの声はうるさいと、保育園新設の反対運動が起きる。騒音は生活が平和で豊かで活気に満ちていてこそ生まれる音だ」と。

小生は、今年77歳。十分に年をとっていると思うが、この映画を見るとまだまだ若いという錯覚に陥らされる。

（容）

監督＝前田哲／2024年／日本／99分